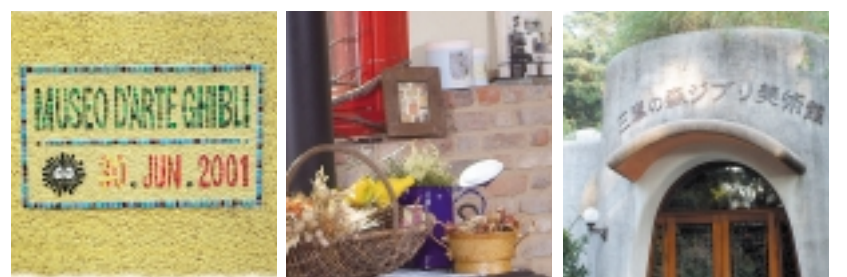


新春初夢対談 in 三鷹の森ジブリ美術館



日本初のアニメーション美術館として、井の頭公園の西園に誕生した三鷹市立アニメーション美術館（「三鷹の森ジブリ美術館」）。創立5周年を経過した今も、その人気は衰えることなく、行政と民間の協働を目指す三鷹市の象徴的なスポットとして日本国内だけでなく、国際的にも注目を集めています。

今年の新春対談では、多くのアニメーション映画作品を制作したスタジオジブリの鈴木敏夫プロデューサーと清原慶子三鷹市長が、美術館誕生の秘話やプロデューサーの仕事の妙味、子どもたちの未来と「夢」について語り合います。



清原慶子市長
Keiko Kiyohara
1951年生まれ。慶應義塾大学、同大学院で学んだ後、ルーテル学院大学文学部助教授・教授、東京工科大学メディア学部教授・学部長を経て、2003年4月に第6代三鷹市長に就任。政府IT戦略本部有識者本部員、総務省情報通信審議会・国土交通省国土審議会・内閣府国民生活審議会・同障害者施策推進協議会等の委員も務め、市民と自治体の立場から国に対して意見を表明している。



「協働」の力で成功するプロデューサーの仕事
鈴木：僕はもとと徳間書店で記者や編集者をしていました。それが、ひょんなことからアニメーション雑誌を担当し、宮崎駿と出会うことになりました。
清原：鈴木さんの存在が、私たちに「プロデューサー」という仕事を身近に感じさせてくれました。でも、最初からプロデューサーを志していたわけではありません。この仕事は本気でやっていますか？
鈴木：僕はもとと徳間書店で記者や編集者をしていました。それが、ひょんなことからアニメーション雑誌を担当し、宮崎駿と出会うことになりました。
清原：鈴木さんの存在が、私たちに「プロデューサー」という仕事を身近に感じさせてくれました。でも、最初からプロデューサーを志していたわけではありません。この仕事は本気でやっていますか？

お祭りの会場で賑々と観覧する若者がいたんです。誰だか分からなかったけれど、急に振り返って、「鈴木さん、吾朗です」とあいさししてくれました。それがとても印象的でした。
清原：でも、それは「プロデューサー」ですか？
鈴木：宮崎駿が「プロデューサー」になった美術館は、「美術館」のイメージを壊すものでした。静かにしたり、暗かかったりという美術館の常識をすべてひっくり返す。そんな美術館を運営するにしたら、経験よりも、物事を柔軟に考えられる人材が必要だったんです。
清原：吾朗さんには事前に話していたのですか？
鈴木：まったく話していません。お祭りで再び

「僕は公園で育てられた」子どもだけの公園計画
鈴木：公園は、子どもたちがただ過る場所が必要というところですね。
清原：社会に、子どもたちだけで過る場所が必要というところですね。自然を壊してもいい場所がある。自然を壊してもいい場所がある。自然を壊してもいい場所がある。自然を壊してもいい場所がある。



有する多様な主体が、「協働」(「コラボレーション」)して目標を達成することを市政の大事な取り組みにしています。
鈴木：僕には素朴なところがあって、即決でいいから、想像以上にやってくれました。彼がいたから、この美術館の基礎が築けました。今は、宮崎吾朗が信頼する中島清文館長が引き継いで頑張っています。
鈴木：僕はもとと徳間書店で記者や編集者をしていました。それが、ひょんなことからアニメーション雑誌を担当し、宮崎駿と出会うことになりました。
清原：鈴木さんの存在が、私たちに「プロデューサー」という仕事を身近に感じさせてくれました。でも、最初からプロデューサーを志していたわけではありません。この仕事は本気でやっていますか？

映画、憲章、絵本館 子どもの視点を大切に
鈴木：子どもたちの未来を考えると、どんな夢が広がりますか？美術館のほかに、また、鈴木さんと協働する何かを始めたいですか？
清原：子どもたちの未来を考えると、どんな夢が広がりますか？美術館のほかに、また、鈴木さんと協働する何かを始めたいですか？



所「自然は自分の手と壊さなければ、本当の意味で大切にできない。清原さんにとって、少女時代はそうだったんですよ。」
清原：私は井の頭公園や原っぱで育ちました。鈴木：大人は「いなくなったよ」。
清原：いなくなったよ。
鈴木：何をしてもいい場所、悪いことをしなければ、子どもでいいことと自分からいかなければ、そんな公園を作りたいですね。

ジブリ美術館は「指定の予約制で、チケットは「J」で販売しています。三鷹市民特別のチケットの販売は毎月13日(三鷹)の46:00:00(午後6時)から行っています。
☎0422-45-1151

鈴木：絵本に描かれている、真剣に取り組みはきつと面白いですよ。清原さんと話していると、いろいろなことをやりたくありません。行政だと難しいかな？
鈴木：悪いこともやりたくありません。井の頭公園は、自分が育った遊び場なんです。小さいころは、花火大会であつたんですよ。
鈴木：悪いこともやりたくありません。
清原：悪いこともやりたくありません。
鈴木：悪いこともやりたくありません。



井の頭公園をめぐるジブリと三鷹の出会い
鈴木：ずっとお伺いしたかったのですが、三鷹市の美術館を建てようと思ったのはなぜですか？
鈴木：実は内部で話し合っていた初期のころは、ヘテラン社員が活躍したんです。スタジオジブリの創立は1985年。時が経つにつれ、スタッフの年齢も上がってまわりました。ヘテランのスタッフに経験を生かしてどのような仕事をしてもいいかを考えていました。
清原：もちろん、宮崎駿さんと一人でお考えいらしたのですか？

鈴木：宮崎駿と話して、「絵の描ける素人のいるギャラリーなんかあったらいいな」というアイデアが生まれたんです。
鈴木：結果的にはその話はまだなかったんです。その後、ジブリとして美術館をつくらうという議論が開始された。そんな時に三鷹市から話が来たんです。すこしタイミングがよかった。
清原：井の頭公園の西園に市民に喜ばれる施設をつくりたいという三鷹市の願いと、ジブリのみなさんの想いが出会ったのです。



鈴木敏夫さん
Toshio Suzuki
1948年愛知県名古屋出身。慶應義塾大学文学部卒業後、徳間書店に入社。78年に日本初のアニメーション専門誌「アニメージュ」の創刊に参加。創刊号の取材で宮崎駿に出会う。同誌での連載を経て映画化された「風の谷のナウシカ」(1984年)以来、宮崎作品の製作に携わる。1989年にスタジオジブリの専任プロデューサーに就任、一連の大ヒット作を手掛けている。

宮崎吾朗館長の誕生秘話 一瞬の出会いを信じて
鈴木：三鷹の森ジブリ美術館が完成した6年前、驚いたのは館長に宮崎駿さんのご長男である宮崎吾朗さんが抜擢されたことでした。プロデューサーとして、館長を吾朗さんにと考えたのはなぜですか？
鈴木：宮崎吾朗との初めての出会いは、彼が中学生のころでした。でも、それからはすこしずつ近づいて、再会したのは彼が26歳のときでした。宮崎駿のお父さんが亡くなって